

# 魔法のプロジェクト2021 活動報告書

報告者氏名:小室 惟 所属:長野県飯田養護学校 記録日:2022年 3月 2日

キーワード: 観察、刺激の統制、介入

## 【対象児の情報】

・学年

中学部 3 年 (A 生)

・障害名

重度重複障がい

・障害と困難の内容

身体の動きが僅かかつ不安定である。刺激を提示したり教師が働きかけたりした直後に観察できた身体の動きが、本当に提示した刺激やかかわりと関連しているのかを推察することが難しい。そのためかかわり方や授業内容が A 生にとって適切なものかどうか、分からない。

・使用した機器

iPad

## 【活動目的】

・当初のねらい

○A 生が明らかに身体の動きが観察できる【触刺激】を用いて、一瞬の定位反応から持続的な反応(外の刺激に意識を向け続ける)になるようなかかわり方を模索する。

○特定の身体の動きや状態について介入し、その後の身体の動きの変化を見る。

・実施期

2021 年 5 月~2022 年 2 月

・実施者

小室惟、訪問教育担当者 3 名、佐野将大(香川県立高松養護学校)

・実施者と対象児の関係

小室惟…校内職員

訪問教育担当者 3 名…主任 1 名、担任 2 名(3 名で授業を担当)

佐野将大…共同研究者(香川県立高松養護学校)

### 本実践に至った経緯 ～なぜ【観察】するのか～

- ・重度重複障がいのある児童生徒は、発語がなく、動きが見えづらかったり、不随意運動やけいれんのような動きが見られたりして、反応を捉えにくい。そのため、教師主導の授業展開や一方的なかかわりになってしまい、双方向のやりとり(コミュニケーション)は成立しにくい。
- ・かかわる中で「この遊びが好きそう」「顔の辺りを触られるのは嫌いなのかな」と感じる事がある。これはかかわる中で得られる大事な視点である。他方で、それらを客観的に評価する方法を、教師は持っている必要があるのではないかと。客観的な評価の一つとして児童生徒の身体の動きの【観察】がある。【観察】によって「児童生徒一人ひとりには意思がある。それをどのような方法で表現したり、かかわりに対して受容/拒否したりしているか」を整理できるのではないかと。
- ・【観察】は、教師の経験や勘に頼らない方法である。【観察】を通して、例えば「音楽を掛けたら身体の動きが減少した。音楽に注意を向けているかもしれない」と仮説を立てることができる。仮説を立てたら、授業やかかわり方、教材教具の工夫ができる。
- ・仮説がより確からしいと分かれば「身体の動きが減少しているときには、何かに注意を向けている可能性が高い」と考えてかかわることができる。すると注意を引くもの、そうでないものがやりとりの中で掴めるようになり、その場で柔軟にかかわり方を変えていくことができる。
- ・このように、児童生徒の動きを捉えて教師がかかわりを変えていく、双方向のやりとり(コミュニケーション)を目指すために【観察】を軸として実践を展開した。

### 【活動内容と対象児の変化】

#### ・対象児の事前の状況

A 生は何を見聞きし、感じ取り、それに対してどのように反応しているのだろうか？

A 生はベットサイドで週 2 回の訪問教育を受けている。実態として、

- ・身体の動きは僅かかつゆっくりである。
- ・動きの中には不随意のようなブルブルと震えるものや、身体が跳ねるようなビクツとしたものも含まれており、どのように解釈していいかわからない。
- ・日常場面や授業場面で身体の動きが見られても、それが何かに対する反応なのか、あるいは生理的なものなのかは、見分けることが難しい。

が挙げられる。

そこで A 生を【観察】するところから実践を開始した。

#### ・活動の具体的内容

刺激を統制して、【観察】を行う

《目的》

- ① A 生は何を見聞きし、感じ取っているのか(受容の面)
  - ② A 生が見聞きし、感じ取ったことに対して、どのように反応しているか(表出の面)
- を、刺激を統制して観察、整理する。

《刺激の統制》

- ・提示する以外の刺激を抑える、または変えない。

例:音刺激として楽器の音を鳴らす場合、教師は声掛けや足音などが入らないようにする。また、鳴らす前後の環境(空調の音や電灯)は操作しない。今過ごしている環境に楽器の音だけが出入りするようなイメージで行う。

### 《提示した刺激》

触刺激…教師が身体に触れる、毛糸玉やたわし、水風船などの感触

音刺激…ツリーチャイムや民族楽器、電子ピアノなどの音、ふれあい体操の音楽

光刺激…カーテンを閉める／開ける、部屋の照度を下げる／上げる、教師がA生を覗き込み部屋の明かりを遮る

### 《実施方法》

- ・刺激を提示する時(刺激 ON)と、その前後(刺激 OFF)を同じ時間だけ設定した。
- ・その様子をビデオで記録し、それぞれの時間での動きを書き出し、また動きの量を比較した

### 《結果》

① A生は何を見聞きし、感じ取っているのか(受容の面)について

明らかに身体の動きが観察できたのは触刺激であった。

② A生が見聞きし、感じ取ったことに対して、どのように反応しているか(表出の面)について

次のような動きが観察できた。

- ・足の指(親指)が屈曲するような動き
- ・口腔内での、舌の前後の動き
- ・下顎が下がって口を開けるような、カクカクとした動き
- ・頭頂部を布団にこすり、顎を突き出すような動き
- ・頭と背中を反らすような動き
- ・腕のブルブルと震えるような動き

○刺激を提示した直後の動きは、例えば次のようなものであった。

姿勢	刺激(触・音・光)	どこがどう動いた?
右側臥位	(触)左手にかけていたタオルをめくる	左足の指が10秒かけて2回屈曲する
左側臥位	(触)左手首を持って腕を持ち上げる	全身がビクッと跳ねるように1回だけ動く

### 《考察》

・触刺激は、聴覚刺激や光刺激と違い、直接的な刺激である。そのため自身に向けられた刺激として気づきやすいのかもしれないし、逆に刺激が強すぎるために反応が顕著に見られるのかもしれない。現段階ではどちらであるか、断言はできない。

・様々な身体の動きを確認できたが、その動きがA生のどんな心情を表現しているか、現段階では分からない。

以上から、今年度の目標は下記の2点となった。

○A生が明らかに身体の動きが観察できる【触刺激】を用いて、一瞬の定位反応から持続的な反応(外の刺激に意識を向け続ける)になるようなかわり方を模索する。

○特定の身体の動きや状態について介入し、その後の身体の動きの変化を見る。

以降、触刺激を中心に、様々な刺激を提示した。しかし、思うように実践を進めることができなかった。  
その原因として、3点考えられた。

**原因1** 記録されている「A生の動き」に報告者の意図が入りすぎているのではないかと？

例えば

「右肩に触れる→右を向くような動き」

「左手に触れる→頭と背中を浮かせて体を反る動き」

という記録があるが、ビデオを見返すと、動きとしてはどちらも「首が回旋した」と表記できる。つまり、「右を向く」「頭と背中を浮かせて反らせる動き」は報告者の解釈であり、「教師が右肩に触れたとき、A生には「何?」と注意を向けているような動きがあっほしい」と言う意図が入っている可能性が高い。意図が入ると、選択肢が狭まり、他の可能性が見えなくなってしまう。今後記録は「どう動いたか」を集めていく必要があるだろう。

**原因2** 身体の動きからA生の認知処理の状況や心情を説明できていないのではないかと？

刺激を統制して、【観察】を行うで観られた「(触)左手にかけていたタオルをめくる→左足の指が10秒かけて2回屈曲する」は、A生のどんな認知処理や心情だと説明できるだろうか。「手がヒヤッとしたなあ」なのか、「寒い」なのか、それ以外の理由なのか、刺激とは無関係に動いただけなのか。

**原因3** 【観察】の視点を変えていかななくてはいけないのではないかと？

刺激を統制して、【観察】を行うでは、「意図的に刺激を提示する」ことで、A生の動きを集めた。刺激の統制というのはあくまで手段で「刺激を統制すれば何かが達成できるわけではなさそうだと感じるようになってきた。A生の身体の動きを「これは嫌なんだ」「これは集中して聴いているな」と発信として捉えることで、A生と双方向のコミュニケーションを取りたいのだった。そのためには「教師が意図して提示した刺激にどのように反応するか」から、「A生の興味を引きそうな物を提示して、A生に「なにになに?」と振り向いてもらうようなかわり方に移行していく必要があるのではないかと。

原因2, 3を解決するためには【観察】の視点を変える必要があるとそうだ。

「意図的に刺激を提示する」【観察】から、次にどんな視点で【観察】をしたら、「A生とのコミュニケーション」につながるか、共同研究者より「これまで観察された動きを引き出すために介入し、その様子を【観察】する」とご助言をいただいた。

- ・引き出したい動きは、じっくりゆっくりした動き(首の回旋など)である。この動きは「おや、何だ?」とA生の注意が向いている可能性を示す動きである。(一瞬の「ピクッ」とした動きは、脊髄や脳幹などの運動制御経路でパターン化されたもので、大脳の指令を受けていないで起こっている動きの可能性が高いため避けたい。)
- ・じっくりゆっくりした動きを引き出すためには、A生が「おや、何だ?」と思えるかわり方、刺激の提示、触れる身体部位を探す必要がある。

そこで、報告者、訪問教育担当者3名、共同研究者で動きを引き出すために介入し、その様子を【観察】する授業を実施した。

動きを引き出すために介入し、その様子を【観察】する

《目的》

これまで観察された動きを引き出すために「どのような刺激を」「身体部位のどこに」「どれくらいの強度や時間提示する」と、動きを引き出せるかを試行する。

《方法》

A 生の反応が見られやすい「触刺激」と「聴覚刺激」を用いて、じっくりゆっくりした動き（首の回旋など）を引き出すようにかかわる。（例えば、首の右回旋を引き出すために、A 生の右肩や右腕、顔の右側からアプローチする）

《用いた刺激》

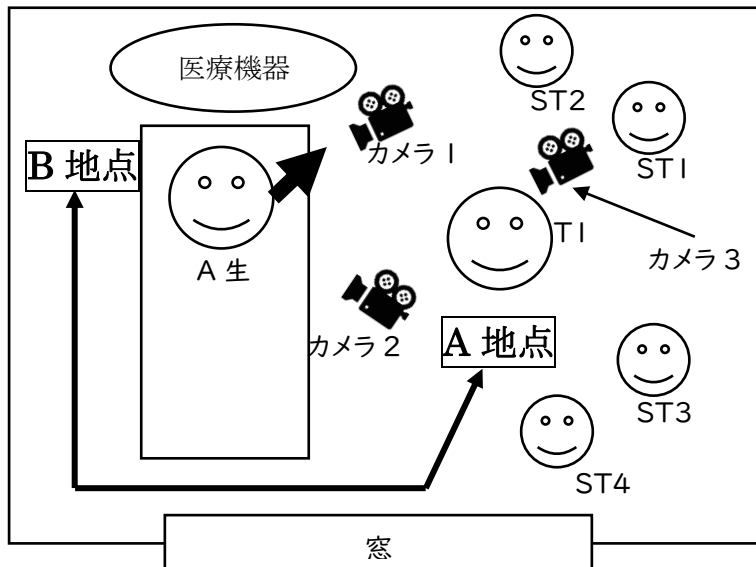
- ・聴覚刺激（TI の声掛け、ネックスピーカーから流れる音楽）
- ・触刺激（TI が触れる、ブラシで髪をとかず、頭皮マッサージ器）

《本時の展開》※一部抜粋

観察に対する活動	TI の動きや活動の具体的内容 等
(1) 聴覚・触覚への定位・防衛の観察	・TI が A 地点から声をかける。スリッパを履いて足音を立てながら生徒の周りを移動する。B 地点で活動を行う。(※1) ・生徒の顔を覗き込む。しばらくして声をかける。右肩近くのベッドをトントン、とし、刺激を伝える。そのまま右肩に近づいていき、右肩に優しく触れる。その後、さすってみる。両手で包み込むようにしてみる。そのまま首の方へ移動し、頬に触れる。しばらくしてほほをさすってみる。その後、両手でほほを包み込んでみる。その後、首の後ろを移動し、頭皮に触れる。頭皮をさすってみる。 ・その後、これとは逆の順番で刺激を提示していく。足音を立てて B 地点から A 地点へ足音を立てながら移動する。(※2)
(2) 条件を追加して観察する。 ① マッサージ器を頭皮に当てる	・(※1)の順序で生徒に接近する。 ・生徒の右耳の周辺に触れる。 ・右肩辺りでマッサージ器を ON にして、右耳に近づける。右の後頭部に 30 秒程度当てて、後頭部から離し、マッサージ器を OFF にする。(※3) ・(※3)を繰り返したり、後頭部には当てずマッサージ器の音だけを聴かせたりする。 ・(※2)の順序で生徒から離れる。

- ・※1ならび※2…A 生へどのように「人の接近」「人が離れる（遠ざかる）」を伝えるかも実施し、観察の対象とした
- ・A 生の動きによって、刺激の提示を中断する、刺激を再度提示するなどして、「どのようにかかわると動きの再現性が見られそうか」を知るために臨機応変に対応する。

## 《職員の配置》



カメラ1の映像  
舌、下顎などの動き、  
表情(顔の赤らみ)な  
どの変化を記録



カメラ2の映像  
首の回旋、呼吸(胸の  
上下)を記録

## 《A 生の状況》

- ・ベッドに左側臥位。
- ・上半身の布団をめくった状態(顔~呼吸の様子が観察できる状態)

## 《結果》

ビデオの見返しだけではなく、いくつかの方法で見えていった。

### ① 報告者・訪問教育担当者3名・共同研究者で、授業時の気づきを共有

授業中の A 生の反応について、気づいたことを共有した。その動きが本当に表れていたかどうかではなく、普段授業をしているときのように、その場で感じたこと、観察したこと、観察に関わる迷いなどを大事にした。

### 《共有した気づき》※一部抜粋

#### 【授業者(T1)】

- ・授業全般を通して、A 生にかかわりを受け入れてもらっているような気がした
- ・呼吸の様子が変化していた気がする
- ・右眉毛の毛根あたりの動きが見られたように感じた

#### 【観察者(ST1~3)】

- ・授業中、身体の動きが多く見られた
- ・耳に触れられたときに、お腹の動きが大きくゆっくりになった?
- ・予告(本時の展開 ※1)の3回目くらいで、穏やかな反応に見えた
- ・授業の途中から発声が増えたように感じた
- ・モニターで心拍の変動を見ながら観察した。ブラシで髪をといたときの心拍の加速反応はどのように解釈したらいいのか

## ② 共有した気づきを整理する

A 生の身体の動きが観察されたということは、「何か」に反応したということである。その「何か」を2つに分けた。また、反応が表れた身体部位も整理した。

### 【触れられたことによって反応した可能性】

耳、頬、肩

### 【外界の変化によって反応した可能性】

接触するもの…身体接触、ヘアブラシ、頭皮マッサージ器、脱脂綿

人のかかわり…予告（例：足音をパタパタさせて接近する／遠ざかる）、かかわりの停止

住環境…飼い猫（首輪に付けた鈴が猫の動きに合わせて鳴ったり、猫が歩いたりする状況）

その他…音楽（音量や A 生と音源との距離）

### 【反応が表れている身体部位の可能性】

・心拍（授業のビデオと並行して、ビデオ録画する）

・呼吸（深い／浅い）、お腹の動き、唾液、舌、涙

・頬の顔色（授業前、授業後の静止画を比較する）

・首のゆらぎのような動き

・発声（口元にマイクを設置して確認する）

・右眉毛の根本あたりがピクピクする

・口元、首の回旋、足

・心拍、頬の顔色、発声について、これまで観察ができていない点だった。それぞれをどのような記録方法で観察していけるか提案（カッコ部分）した。

## ③ ビデオの見返し

ビデオは細部を見るのではなく、早送りでも見返した。その中で A 生の動きがあれば停止し、動きを引き出した可能性のあるかかわりと、それを【動きが起きている可能性（仮説）】、【その可能性を確かめる意図（A 生にとってどんな利点があるか）と方法】を書き出した。

ビデオの見返し ※一部抜粋

【身体がどう動いたか（止まったか）】	【その動きが起きている可能性（仮説）】	【可能性を確かめる意図（Q）と方法（・）】
マッサージ器が右後頭部に当てられたときに首が右に回旋した	<ul style="list-style-type: none"> <li>・マッサージ器の振動に気づいた</li> <li>・マッサージ器の音に気づいた</li> <li>・「何これ?」と思った</li> </ul>	<p>Q. 刺激が本人の注意を引いた? 肯定的な反応? 注意を引くかかわり方の一つとして知っておきたい。</p> <p>・スイッチオンで「音を聴かせるだけ」と「マッサージを行う」の比較</p>
TI がベッドに肘をついたときに胸の上下が大きくなった（呼吸が深くなった）	<ul style="list-style-type: none"> <li>・びっくり</li> <li>・息を飲む感じ</li> </ul> <p>（緊張の高まりだったら呼吸が浅くなるはず…?）</p>	<p>Q. 呼吸の深浅によってその時にどんな気持ちか（緊張しているのかリラックスしているのか）想像する材料になるのではないか。</p> <p>・人がかかわらないときと、かかわるとき、ベッドに肘を着くときで胸の動きを比較</p>

## 《考察》

・②、③から、様々な可能性(仮説)を考えることができた。特に②【外界の変化によって反応した可能性】では、A 生が私たちの予想を超えた僅かな音や振動などもキャッチしている可能性もありそうだ。この可能性を知れたことで、例えば授業中に母が近づいてきたときに、A 生がそこに注目しているような身体の動きの減少が観られたら、「何か音がするね…お母さんだったね」と場面を共有できるかもしれない。

・これまでは身体の動きを観るために授業ビデオを使用していたが、実際に A 生とかかわって感じる事、ビデオでは記録できないこともある。T1 の「A 生がかかわりを受け入れてくれていそうだ」と感じたことも、その一つである。記録だけ、感じたことだけ、ではなく両者を大事にして実践を進めていきたい。

・心拍、頬の顔色、発声などはこれまで観察してこなかった。具体的に何によって変化が起きたかはまだ分からないが、A 生の変化を捉える視点が増えた。これらの具体的観察方法も提案できたので、今後も観察を継続したい。

・一方で授業時間中だけの観察では難しいことも分かった。刺激 OFF で教師が全くかかわらなかったとしても、教師が居室にいることを感じて A 生が緊張感を持って過ごしている可能性があり、その場合刺激 OFF の時間はベースラインとは見られない。そこで **A 生の日常(授業以外)の様子を、家庭で撮影**していただくように依頼した。

## A 生の日常(授業以外)の様子を、家庭で撮影していただく

### 《目的》

ベースラインとして、日常の A 生の動きを把握する

### 《方法》

保護者に依頼し、A 生の家庭での様子をタイムラプス機能(※)で録画してもらう

※タイムラプス機能…数秒後との静止画をつなげて30秒程度の動画にする機能。

### 《結果》

次の2点で結果を見た。

#### ①ビデオの見返し

3本のビデオから、次のような様子が見られた。

#### 《A 生の日常の様子》※いずれも左側臥位の様子

- ・下顎が絶えず動いている
- ・口腔内で唾液が増加している
- ・首の回旋はほとんど見られない
- ・顔が左右に素早く動くことがあった
- ・顎を突き出すような(後頭部が枕に沈むような)動きがあった

#### ②訪問教育担当者と、ビデオの見返しを照らし合わせる

①に書き出した様子を基にアンケートを作成した。アンケートの項目は、これまで A 生の動きとして多く見られたものを中心に抽出した。訪問教育担当者 3 名にそれぞれビデオを見返した後に回答してもらった。

	報告者	訪問教育 担当者 A	訪問教育 担当者 B	訪問教育 担当者 C
A.首の動きは見られましたか	×	○	○	○
B.頬の紅潮はありましたか	×	△	△	○
C.目の開き(瞼の開き)の変化はありましたか	×	×	○	×
D.下顎の動きはありましたか	○	○	○	○



- ・「D.下顎の動き」について、全員「○(動きが見られた)」と回答した。
- ・その他の項目は多少ばらつきがあるが、「C.目の開き(瞼の開き)」はないと感じた先生が多く、「A.首の動き」はあったと回答した先生が多かった。
- ・「B.頬の紅潮」については意見が割れた。

#### 《考察》

- ・「D.下顎の動き」は日常的に動きがあり、刺激の提示にかかわらず下顎は動いている可能性が高いだろう。普段から動きが見られるということから、かかわった時の変化を見る視点としては使いにくい可能性があると考えられる。
- ・「B.頬の紅潮」「C.目の開き(瞼の開き)」については、タイムラプスで見たことによって、変化がわかりにくかった可能性がある。以前、静止画を比較して頬の紅潮具合や目の開き具合に差があることを共有したことがあるので、見返しの方法が適していないかもしれない。改めて静止画で確認したい。
- ・「A.首の動き」については、多くの先生が「○(動きが見られる)」と評価した。と言うことは「首の動きは普段から見られる」として、授業やかかわりの時に「首の動きに変化があった」ことを捉えないといけないかもしれない。

#### ・対象児の事後の変化

A 生の変化かもしれないし、教師の観察の視点や引き出しが増加したことで気づけたことかもしれない。

#### 【身体の動き】について

- ・これまで見られた動きを整理するだけではなく、**A 生の日常(授業以外)の様子を、家庭で撮影**していただいたことから、観察する身体の動きを絞れたように思う。これによって「授業やかかわりの中で A 生のどんなところを注意して見たら、即時にやりとりができそうか」を考えていけるように思う。
- ・今年度新たに見られた反応に「頬の紅潮」「瞼の開き」がある。A 生の変化を捉える点が増えたことは良い。

#### 【ICT の活用について】

- ・ICT 活用によって、長時間の観察、家庭での撮影依頼が可能になった。
- ・撮影した動画を、再生速度を変えるなどして僅かな動きも捉えやすくなり、可能性を多く見いだすことができた。
- ・動画をスクリーンショットにして比較することで、頬の紅潮に気づくことができた。
- ・訪問授業は基本的に職員一人で自宅に伺う。そのため、機器の準備、設定などに負担が出てしまう。職員体制の工夫または機器の選定が必要だろう。

#### 【今後の展望】

- ・どの身体部位で反応しているかが確からしくなる一方、その動きはまだ、快なのか不快なのか(かかわりや刺激に対する接近なのか回避なのか等)を判断することは難しい。嫌なことは避けたいし、痛いことは気づいて取り除きたいし、興味のあることは繰り返し触れられる環境を作りたい。そのためには、可能な限り授業やかかわりの中で、A 生の反応を捉えられると良い。
- ・仮説については「なぜそれを明らかにしたいのか、明らかにすると生徒にとってどんなよいことがあるのか」を考えながら、確かめていきたい。
- ・今後は「動き」「頬の紅潮」「瞼の開き」についても、仮説を立てて授業やかかわりの中で観察を継続したい。仮説の確からしさが高まったときには、訪問教育担当者だけではなく、保護者、訪問看護師、居宅介護サービス者などと共有し、A 生の生活場面でも A 生と色々な方々とのコミュニケーションに広げていきたい。

【報告者の気づきとエビデンス】

・主観的気づき

○「【刺激】と【観察】の関係をどう見ていくか」の迷いと気づき

図1は本実践のおおまかな流れを図式化したものである。

これまで、観察とは**刺激を統制して、【観察】を行う**ことだと思っていた。しかしそれだけではないと知った。

最初に**刺激を統制して、【観察】を行**ったことで、動きを整理できた。しかし教師側から刺激を提示し続けることは、教師がA生を「受動的な状態にさせてしまう」ことになる。刺激の統制で見られた「おや、なんだ?」という**「動きを引き出すために介入し、その様子を【観察】する」**授業を実施する過程で「A生と何がしかったのか…コミュニケーションを取りたかったのだ」と当初の目的に立ち返った。

**刺激を統制して、【観察】を行う**も**「動きを引き出すために介入し、その様子を【観察】する」**も、刺激を提示すると言う点は同じだが、「教師が選んだ刺激にどう反応するか」ではなく、「A生がどんなものに興味関心を持っているのか、A生に尋ねる」という視点に移行したと思う。尋ねることが、今後例えば「今日は絵を描くよ。どの教具を使おうかな」などを、A生の反応を見て(やりとりをして)決めることができるかもしれない。

また、**A生の日常(授業以外)の様子を、家庭で撮影**していただくことによって、今まで動きとして捉えていた「下顎の動き」が日常的に見られることが分かった。授業中に不規則に表れることがあったので、刺激の統制のタイミングによっては「刺激によって動いた」と解釈していただろう。ベースラインを整理することによって、授業中の動きの変化をどう捉えるかを確認するきっかけとなった。

○訪問教育担当者より

授業内容やかかわり方を变化したことや、迷いなどを聞いた。

【A生を観ることについて】

- ・以前は比較的大きな動き(手、足、体を反らすなど)に注目しがちだったが、今年度は口元や舌によく注目した。わずかな動きでも、A生自身の表出と考えが变化した。頬の紅潮など動き以外の变化にも注目できるようになった。
- ・思い込むこと、決めつけることをやめようと思った。楽器の音の方がよく届いている感じがする、となると、楽器ばかりを教材に選んでいたが、話し声や読み聞かせも聞いているようだし「そこに成長があるかもしれない」と思って、伝わりやすいことだけではなく、そうでないものも少しチャレンジする価値があると思う。

- ・「話し声や読み聞かせも聞いていそうだ」と思えたのも、A生の変化(頬の紅潮)を捉えたからだろう。教師が「そうであってほしい」に加えて変化も捉えられると「確かに聞いてくれている」と自信と安心につながるだろう。

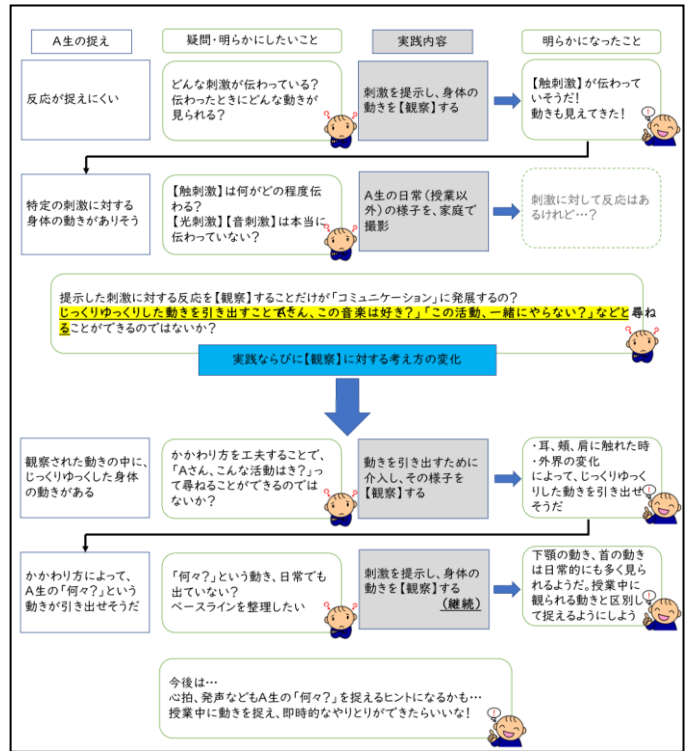


図1 本実践の流れ

### 【授業やかかわりの工夫】

- ・冷たい水風船を教材にしていたときには、表出があったが、「そりゃ、驚くわ。」という冷たさ。冷たいという感覚を学習する、苦手意識を和らげたいとの思いから、気持ち良い冷たさを味わってもらうことに変更。保冷剤を溶かして、夏場に10~15度の間のものに触れるように変えてみた。
- ・以前は音に頼った授業（CDに合わせて歌う、Sさんの手を添えて鈴などの楽器をならす、いくつもの音を同時に聞くなど）が多かったが、今年度は触れて感じる学習を大切に、感触のバリエーションを工夫したり、聴く学習も1つの音を丁寧に感じられるようにしたり、必ず無音の時間をはさんだりすることを心掛けた。
- ・匂いは伝わりづらいかも・・・と思っていたが、ピーマンを近づけてみたり、アロマの香りがするものを袋から出した瞬間だつたりと反応があった。ON・OFFを区別して提示することが、A生を理解する糸口になると痛感した。

・視点の広がり、既出の教材に囚われない教材選び（匂い、温度の調整）やかかわりなど、柔軟で広い視点で実践していただいた。

### 【授業中に難しかったこと】

- ・「よし、口元を見よう!」と焦点化すると、他が動いているときに見逃してしまっていることがあるような気がする。集中しつつ、でも、全体をぼんやり見るのは難しいと感じている。
- ・活動前の予告のやり方（布団をつつく、足音をたてて近づく等）について、自分の中で「これでいいのか」という迷いがあり、いまだに難しい。手探りでやっている。

・先生方は即時にA生の反応を捉え、フィードバックをしようと心がけてくださっているが、授業を行いながら全身を観察するのはなかなか難しい。複数人での訪問授業や、ICTを活用して視野外の動きを捉えることができたらいと感じる。

・その他エピソード（画像などを含めて）

3学期は新型コロナウイルス感染予防対策として、リモートでの授業が行われた。訪問教育担当者が授業の前後でビデオのスクリーンショットを撮影し見比べたところ、授業後の瞼の開き、頬の紅潮が確認された。担当者3名で「(リモート授業でのタブレット操作のために)お母さんが側にいて声が聞こえたからかな」「こちらの声が届いていたら嬉しいね」など、変化の可能性について話したとのことだった。訪問教育担当者からの実践の感想にもこのことが書かれていた。

### 【「A生のこんな姿が嬉しかった!」エピソードを教えてください】

○リモート授業の始まりと終わりで顔色が違っていたこと。

○リモートになってから、授業を始めて話しかけているうちに、顔色が明るく頬が紅潮していくのがわかった。直接のかかわりはできなくても、何か感じていることがあるのだと嬉しくなった。



授業開始直後のA生



授業終了間際のA生

(頬の紅潮と瞼の開きに変化が観られる)